



写真：電子システム工学科3年 宝田拓也「宮入り」

- |    |                         |                |                     |
|----|-------------------------|----------------|---------------------|
| 1  | 図書館との出会いと本を読むこと         | 高松キャンパス一般教育科   | 伊藤喜久代               |
| 2  | 読書感想文等入賞結果発表            |                |                     |
| 3  | 講評(高松・詫間)               |                |                     |
| 4  | 入賞作品紹介                  |                |                     |
|    | 《高松》 読書感想文              | 【優秀賞】          | 制御情報工学科4年 福富 晴菜     |
|    | 千頁読破記                   | 【優秀賞】          | 電気情報工学科2年 関屋 瑞樹     |
|    |                         | 【佳作】           | 電気情報工学科4年 鈴木 雅敏     |
|    |                         | 【佳作】           | 1年1組 高崎 夏帆          |
|    | 夏休み体験文                  | 【優秀賞】          | 1年1組 柴谷遼太郎          |
|    | 《詫間》 読書感想文              | 【最優秀賞】         | 1年7組 安藤 翼           |
|    |                         | 【優秀賞】          | 電子システム工学科3年 岩倉夕希子   |
|    |                         | 【優秀賞】          | 電子システム工学科2年 貞廣 幸余   |
|    |                         | 【佳作】           | 通信ネットワーク工学科2年 長尾 健太 |
|    |                         | 【佳作】           | 情報工学科2年 矢野友加里       |
| 5. | 教員によるエッセイ               | 高松キャンパス電気情報工学科 | 太良尾浩生               |
| 6. | 教員・学生による推薦図書 全20編       |                |                     |
| 7. | 上半期ランキング〈図書、CD、DVD〉     |                |                     |
| 8. | 図書館からのお知らせ              |                |                     |
| 9. | 第1回ブックハンティングについて(高松・詫間) |                |                     |

# 図書館との出会いと 本を読むこと

高松キャンパス一般教育科  
伊藤 喜久代



私が初めて図書館へ行ったのは、幼稚園に入るかどうかという頃だったと思う。母に連れられ、近くの市立図書館で絵本などのコーナーの本を見たり読んだりしたのが最初だったと思う。母は読書の好きな人で、その市立図書館には週に1回以上は必ず行って数冊借りるのが常だったので、私が図書館へ「遊びに」行くようになったのは自然な流れだったのかもしれない。小学生になり自転車に乗れるようになって行動範囲が広がると、図書館へも自分で勝手に行き、伝記やSF、推理もの、名作物語など小学生向きに書かれた本を手当たり次第に借りて読んでいた。小学生も高学年になると大人向きのSF小説や推理小説も読めるようになり、図書館へ通う回数はさらに増えたと思う。当時の子供にもれずテレビ番組もよく見たと思うが、私にとっては本も大きな娯楽の一つだった。小学生の頃に比較的多くの本に接する機会があったことは、読書を通して想像力や行間を読む力を高めるのに役立っただけでなく、筋道を立て論理的に考え、書くといった、現在の研究をする上で必要なスキルを身につけるための基礎的な能力を形づくる役割を果たしたのではないかと思う。

中学生以降は勉強やクラブ活動が忙しくなり、図書館で本を借りることは年を追うごとに少なくなってしまったが、家にクーラーがなかったため、夏休みには図書館の自習室で宿題をするのが日課になっていた。高校生になってからも、この自習室には夏休みの宿題はもちろん受験勉強などでとてもお世話になった。大学に入ると、それまでよく通った市立図書館への足は遠のいてしまったが、その代わりに

大学図書館で調べ物やテスト勉強をすることが多くなった。

大学卒業後は会社員として民間企業で十年以上働くことになるのだが、その通勤の往復時には文庫本で小説を読むのが長い間日課だった。図書館にあるハードカバーの大きな本は通勤時の読書には向かないため、図書館で本を借りることはなくなってしまったが、小学生の時に図書館で習い覚えた「本を読む」という習慣はその後も長く続くこととなった。会社員生活も十年近く経った頃、思い立って英語の勉強をかなり真剣に始め、そのせいで通勤の時間を含め読書に時間が全く取れなくなったときには、後ろめたさにも似た違和感を一年近くも感じたのを覚えている。

その後、英語学習の熱が高じて会社を辞めアメリカへ渡り、大学院にて英語教育学で修士、および日本人による英語連続音声の知覚研究で博士を修めることになったが、アメリカの高等教育機関で生き残ることができた理由の一つには、小さい頃に図書館で親しんだ習慣によるところが大いにあると感じる。アメリカの大学・大学院教育では、成績に直接かかわる課題論文やテストなどの他に日常的に課せられる膨大な量の予習課題（各科目ごとに毎週教科書を30～50ページ又は学術論文1～3編を読む）があり、それをこなせないと講義内容を理解することが難しく、その結果テストや課題論文の点数も取れず良い成績を取ることができない、という仕組みになっている。もちろん履修科目は1つではないので、1週間に教科書100ページを軽く超える量の英文を読み続けなければいけないのだが、それを何とかこなすことができたのは、興味のある分野だったから、ということ以外に、言語は違うものの日常的に本を読むという行為に対する慣れがあった、ということが大きく関わったと思う。

こうして振り返ると、図書館という存在は私の受けた教育 — 知的成長の過程 — を常にさりげなくサポート、後押ししてくれていたという事実気付かされる。何もできないけれど好奇心だけは人一倍強かった幼児に本に親しむ機会を与え、図書館という後援者を人生の早い時期に自然な形で紹介してくれた、今は亡き母に感謝したいと思う。

## 夏休み読書感想文・千頁読破記・夏休み体験文 入賞結果発表

今年度の夏休み読書感想文・千頁読破記・夏休み体験文の入賞者の表彰式を、高松キャンパスでは10月29日（月）に、詫間キャンパスでは11月1日（木）に実施しました。

入賞者は以下のとおりです。

